



第198號 (第 17 卷)

(昭和12年) 10 月 號

ペル 1 より 歸る

日食觀測隊長 理學博士 山本一清

去る9月6日、我々日食觀測隊は、5ヶ月ぶり、故國横濱港に歸着し、多くの友人に迎えられました。長い旅でありましたが、3人とも、かぜ一つ引かず、健康の身を持ち續け、ほど豫定の任務を果して歸つて來たわけです。——歸つて見れば、故國は殆んど戰時状態で、人々が皆一大國難の前に、緊張の氣を漲らせてゐられるを見て、吾々も自然に其の非常時氣分に巻き込まれて了ひます。

こんどの旅は、昨年の秋に大體の計畫を定めてから、いろいろの準備工作に骨を折りましたが、幸ひに3月に入つて愈々出發のことが決まり、3人一同は、3月29日に京都を出發し、暫く東京に滞在の上、私は先發として、4月1日に氷川丸で横濱を出帆しましたし、柴田、堀井兩君は觀測の諸器械と共に、ノルエ1丸に乗り込み、4月6日に同じ横濱を出帆しました。

私は4月13日米國シヤトル港に着、長距離バスに試乗して、16日にロスアンゲレス着。18日に同港より約束の樂洋丸に乗り込みました。此の船は3月24日に横濱を出た船でしたが、ホノルハ、ヒロ、サンフランシスコを経て、此のロス港に入り、其れから殆んど満船の状態で、マンサニヨ、バルボア、ベナベントウラ、パイタ、ピメンテル、パカスマヨ、サラベリ、ワチョを経て、5月10日に豫定の如く、カヤオ港に着きました。

カヤオに着いてからの私は、暫くりまに滞在して祕國官民諸方面との交渉に當りましたが、意外な歡迎に會ひ、又、期待される所多く、實に多忙を極め、毎夜4—5時間しか眠る暇も無い有様でした。しかし任務の重大なるを思ひ、彼國の學界や政界との接觸、ペル1觀測隊の組織、其の他種々の研究と

調査と畫策等々に勉め、5月14日から17日までは、トルヒヨ市附近の觀測地踏査、19日には大學の委員會で報告、20日には又トルヒヨに飛行して、サラベリに入港のノルエ 1 丸を迎え、其れからは帝國名譽領事館に一行は落ち付いたまい、愈々觀測期に入りました。

觀測點は、トルヒヨ市の西北に當るワンチャコ濱で、距離14軒、此の道を毎朝毎夕往復して、吾々3人は多くの地方官民(殊に彼地在留の日本人諸氏)に援けられながら、器械の据え付けや、晝夜の天體觀測、プログラムの研究等に忙しい日を送りました。

北祕の海岸を觀測地點に撰んだ理由の中には、此の冬期の頃にも晴天を恵まれる可能性が豫期されてゐたのですが、それでも“若しや!?”といふ天氣の心配もあり、又、實際5月末日から6月4日頃までは可なりひどい雲に悩まされて、一時は悲觀したこともありましたけれど、日食の日が近づくにつれて、天氣模様も立ち直り、殊に6月7日と8日とは誠に勿體ないやうな好晴天で、實に満足な觀測をやり遂げました。

こんどの日食觀測に當り、非常に愉快であつたことはペル 1 國の大觀測隊と始終密接に協力援助し合ひ、前後3週間の間、兩隊は全く一つとなつて仕事に従事したこと、尙ほ又、フィッシュ博士の米國觀測隊も遂に吾がワンチャコ村にやつて來て、此の淋しい漁村を圖らずも一國際文化村にしてやつたことでした。

ペル 1 の觀測隊は5月26日からワンチャコに來着し始め、日食の日までに總計20人の大團體となりましたが、滯留中、赤道儀の据え付け、標準時の保持、經緯度の觀測、太陽面の豫備的觀測、氣象觀測などのいろんな方面に我が日本隊としての3人は出来るだけの力を盡し得たのは愉快でした。

日食は豫期以上に成功し、皆々凱歌の中に、トルヒヨを引き上げ、6月12日に一同はリマに歸りましたが、此の後は吾々が日本を立つ頃に全く考へてゐなかつた仕事が出来て、又忙しい日を暮しました。サンマルコス大學で4回の學術講演、アレキパ天文臺跡の視察、ペル 1 國立天文臺の建設計畫、日食觀測報告の作製など、何れも皆之れは私のペル 1 に對する愉快なる學的義務

でありましたが、此の間に私は同大學から名譽學位と金牌とを授せられ、又、吾々3人は同地の地理學協會名譽會員に推薦されました。

柴田、堀井兩君は6月30日に米國船でカヤオを出帆しましたが、私は7月5日に飛行機でリマを出發、同7日パナマで兩君の船に追いつき、13日にニウヨークに着きました。

北米の6週間は殆んど毎日各所を轉々と旅し續けて、3人共に實に寸暇も無い有様でした。其の間に訪ねた學府は、ニウヨークのヘイデン・プラネタリウム、ワシントン府の海軍天文臺、スワースモア天文臺、フランクリン學院プラネタリウム、フラワ天文臺、クック氏天文臺、ハーバード大學天文臺、同オクリジ出張所、オタワ天文臺、トロント大學天文臺、マクマス天文臺、ミシガン大學天文臺、シカゴ市立プラネタリウム、ヤーキース天文臺、シカゴ市立理學博物館、ロリエル天文臺、ロスアンゲレス市立グリフス天文臺プラネタリウム、キルソン山天文臺、カリフォニヤ工學院、リク天文臺、バークリ市大學天文臺、ユカヤ緯度觀測所、ハワイ大學などでありまして、炎暑の夏期でありましたが、休みなく研究を續けてゐた所も多く、有名な“200吋”大反射鏡其他、最近年の新しい優秀望遠鏡を見、又、多くの學者にも會ひました。

こんどの日食はペル1國內に於いて日祕米(米國隊は6班)の3隊が觀測したばかりでなく、南太平洋のカントン島へは混成米國隊と、ニウジランドのエリントン天文臺の1隊とが出張し、又、ハワイ沖では米人ストクリ、ステワート兩氏が汽船ステイルメカ號上で7分6秒といふ長時間の皆既を觀測しましたが、此等の各觀測隊のうち、ニウジランドの隊を除き、ほか全部の人々に吾々は旅中に會つて、相互の觀測を語り合ふ機會を獲ましたのは、僥倖でした。——只、旅程の都合上、ブラジルまで出かけることが出来なかつたのは、返へすがへすも残念であつたと思ひます。

各地至る所で、多くの知人朋友から、あらゆる厚意を戴きました。詳細は拙稿“米洲行日誌”其の他に報告致します。(1937.9.10)